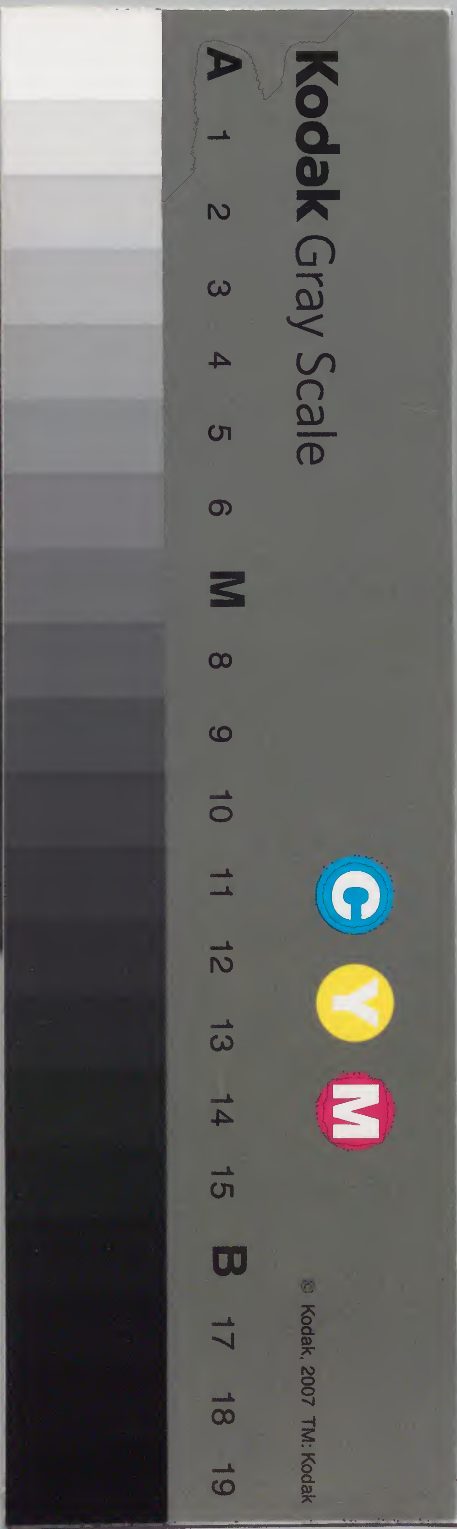


内閣文庫		和
二七九	二	書
九	九	
架	冊	號
九	〇	八
架	冊	號

和		二
内閣文庫		
番號	和	27918
冊數	20	(15)
函號	199	215

二の冊 六架



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

神よなり。國去豊よなり。及よ素
より勝胡けよとせり。き由ひる天照
太神。もか日本乃神くと勸賞り。
異敵とせせり。せもやとぬひ。一年
天竺月支。あしし。の。も。人。を
落。海。ら。う。う。み。凡。は。よ。ま。さ。ひ
光。草。原。出。雲。の。あ。流。せ。り。と。せ

不。老。心。と。め。る。れ。と。い。ふ。こ。り。に。大
日。の。平。字。一。使。り。て。び。り。あ。は。し
ま。ら。神。あ。や。た。と。ま。け。い。心。流。せ
よ。り。と。か。り。後。よ。う。あ。ひ。り。か。こ
り。そ。何。神。乃。宮。他。し。た。し。也。意。
立。や。雲。と。流。り。林。津。崎。く。天。て。り
神。と。り。あ。つ。り。何。吉。甚。日。出。津。波。

和（五）の（下）神（五）の（下）始（下）り（下）の（下）か（下）ら（下）の（下）あ（下）ら（下）
宮（五）君（五）せん（下）く（下） 彼（五）方（下）も（下）た（下）ま（下）の（下）あ（下）ら（下）
伊（五）代（下）の（下）神（下）く（下）の（下）我（下）も（下）塩（下）干（下）の（下）あ（下）ら（下）
衣（五）ま（下）し（下）て（下）や（下）月（下）の（下）あ（下）ら（下）ん（下）を（下）
そ（五）も（下）を（下）何（下）も（下）も（下）み（下）あ（下）ら（下）ま（下）佐（下）
本（五）の（下）浦（下）風（下）は（下）流（下）れ（下）度（下）も（下）と（下）り（下）の（下）あ（下）ら（下）
ま（五）れ（下）一（下）月（下）の（下）あ（下）ら（下）ま（下）は（下）橘（下）の（下）あ（下）ら（下）
ま（五）れ（下）一（下）月（下）の（下）あ（下）ら（下）ま（下）は（下）橘（下）の（下）あ（下）ら（下）

あ（五）ら（下）ま（下）は（下）橘（下）の（下）あ（下）ら（下）
み（五）今（下）も（下）そ（下）令（下）あ（下）ら（下）ま（下）は（下）橘（下）の（下）あ（下）ら（下）
の（五）ま（下）の（下）あ（下）ら（下）二（下）月（下）六（下）日（下）れ（下）右（下）日（下）と（下）あ（下）ら（下）
雪（五）も（下）と（下）は（下）み（下）し（下）て（下）思（下）ひ（下）ま（下）た（下）ら（下）
わ（五）ら（下）ま（下）は（下）橘（下）の（下）あ（下）ら（下）
ま（五）た（下）ら（下）ま（下）は（下）橘（下）の（下）あ（下）ら（下）
の（五）あ（下）ら（下）ま（下）は（下）橘（下）の（下）あ（下）ら（下）
の（五）あ（下）ら（下）ま（下）は（下）橘（下）の（下）あ（下）ら（下）

いふや出雲路は是れなり 田代の
漆の浦つをひくく久村清松の
つらゆりも海をり 磯乃上
カ浪凡や浪よりか舟れあつ海り
小舟もはよ井上の松も子年れ
ひれと月とをいふ早もむ月来
ふきの浦よりかみりるれ里よ

そよよげなくいふ宮人の海り
いづれいそけい入るそ州前
うそ事りてい宮やくつと道志人
あそぬりい人やとつた事よ
てい此もい入るい出雲
森といるもい是れ橋八
そい八の橋もいそい

億らうり罪ありし罪魚よわひる
 ひ旅下も籠や今い森の法小来て
 公と風かよま明夕月の物三をい
 かな高とへて光せぬ心若
 又上書目とあり松陰やわけりあうみ
 上高のの高綿本とけくも
 八年吹く人も物底志ありくも
 ぞふを高もく志のあよ高露風力と
 志とてあうさかりし高あうさく
 平高よ上高に我は是れとれとのみ
 と第三妹少てい高母父系のため
 平高よ思高ひ高とや我二妹と云
 者あま高し高る高核異玉の高ま高れ
 ものう高改高は高津高辺高と高を高い高せん高と

いやは一幸さうな海うやいと
てくれぬの母の姉あまは
そなたいづれをたてて姉とハ
のぬひを おんまをうへ言

兼り下かよくくうあま
御三母君よりまもるはつ
おまの姉高温平のひる

つとくおちもの海は候わ
そなたはぬはるさりとあ
ぶやく通ひぬの共はあま
かひせぬをりしうあめ
あまにさういぬをたてく
いあん肉して十二月に
ひろひをさうあま其時

てんねんまのねんせね君も
おれまも思てぬ中か子ちりなき
て柏乃系よつみ是ははく文お清の
あまをまよし。とらぬねとれを海庭
よまめねんわらわらぬ小崎うね
いりねんかんもさあやとてま
海入のねをまよしり皮のねと柏乃と

日也六十一日とりあえ石見の
くくつは波よりさうやねんあ
あつてねんものゝあまて漁人
又婦出けりうもくはり中あ
うも柏乃系よつみぬ物のまけ
うねあまもさあやとてま
ねんあまもさあやとてま
ねんあまもさあやとてま

かたじけなくけきしよき天のお
そんをこぼりしひろ神ふのさきり
我やしゆりしつちけりかき
よ丸の林も夜をるよ語りあり
わが時高人事りまのきつ社乃志
もろ若振乃ぬらに虫くひか
来き殿上下ありてりやいふた

即ちおびんていづく王子弟三女
今年八十一歳ぬま三年行符信古
里のひろくしと月氣何と西
よもみよらんやうにふまは
とまのりさきりさるの浦と流れ
て九年よい事と中る十一歳よ
ぬまやんと青よらんやうに

此の今家に来りたり
よき事ありき
此の事
の事
ひ
あ
い
今
松

此の事
よ
ど
あ
の
松

成道より久と信り宮ありあり
あきらかにいふわづらひもやう
と魚うりひるやいふりとい
異ふより軍舟もや西海よりい
公得いぞより言ふ人いを長て
いざよりいへていへ異ふより八方
艘の大船よ憶此の共とひてせめ

きりよりいふ中くうをいふ
ていへいけいけいといひてい言語
るのりいけいといへい何といふ
此君いよりいひいより異敷とい
やんといふいといひいといひ
北山やいといふいといふい
あきらかにいふや此君いといふ

十羅刹女とあはれ
きてえ生ののさいうんとあはれんとあ
ひあはれなり あはれ のとあはれなり
の姫宮なり わ とも異國なり わ 不
老心と丸目の女とあはれなり わ
きすけ通の身とあはれなり わ 白鳥と
あはれなり わ 大石とあはれなり わ
あはれなり わ 今やくとあはれなり わ 天竺月とあはれなり わ 我妻也とあはれなり わ 我國うと
あはれなり わ 東よ草原よかみなり わ

よるも色 ^青 八万艘乃舟よ驚く天地
とひききしうらうらして行くを
原や出雲の ^山 原よどき ^山 原よどき
やあふれ八海は八万艘とを今
とく ^山 原よどき ^山 原よどき ^山 原よどき
の ^山 原よどき ^山 原よどき ^山 原よどき
波 ^山 原よどき ^山 原よどき ^山 原よどき

志 ^山 原よどき ^山 原よどき ^山 原よどき
そ ^山 原よどき ^山 原よどき ^山 原よどき
叶 ^山 原よどき ^山 原よどき ^山 原よどき
あ ^山 原よどき ^山 原よどき ^山 原よどき
の ^山 原よどき ^山 原よどき ^山 原よどき
ま ^山 原よどき ^山 原よどき ^山 原よどき
白 ^山 原よどき ^山 原よどき ^山 原よどき

師室經正

是^{早詞}八仁和寺師室乃清可子仕中
大納言の僧都行慶よりて叔父但
馬守經正八幼少よりて此清可に於
て居り此者此度平家西海へ遊大
まひひきて經正も清可供養あり
と八はまゝ尤様よりて此賜乞の心

一序出まへくは肩州出して行。法
に中つあとも付くやとあり。理
心う出仕つるもろりあつと法中
へ此のへ序出まへくは肩州出して行。法
為乃西出まへくは肩州出して行。法
の故まあつと此度平家西海に
まへくは肩州出して行。法
我け下まあつと此度平家西海に
塵まあつと此度平家西海に
お峰今出まへくは肩州出して行。法
いんあつと此度平家西海に
人君まあつと此度平家西海に
よ兼連との所對面ハ兼連ハ感
とありて眼中て理心出まへくは肩州出して行。法

と云ふて此の如くを懸るもあはれに
白く然る莫鉄が力も洞と名に
いなり我も激しく道作のく
任あるる宮内少輔人
も片糸のより人を力外の切
實や浮世の流成の心片
も是を尋ふた處に激乃夕月製桂

川少と懸るも何れに 城何れに

くも此の如く何れに遠出も

掛川よ此の如く由りて 式わ

御者よ用意申へ此の如く

よ系りて此の如く 何僧都の

此の如く此の如く此の如く

よと申へて此の如く

西出下そいそ^月峰今あると入奈地
美よりりすと西海をこよひたる人
伊駒乞乃乃るま多てい水盃と内
りせえ人^毒極て餓別の伊酒人
とめくもいりさんと水際
立やう衣志^元都^元神^元あまら
涙あらしも酒宴とらんさく先

先^{今月}忠愛^{ニル}離別の道が内く
ありそいとも師才急慕乃別
おくハあ^{サレ}途^下旅^下を^下思ひ
ん心乃夕の雲よりのをたせぬ
せんやうせん乃月よし
心^下つ^下くのき^下ひの道^下や^下世
水^下の^下神^下乃^下は^下詠^下も^下其^下く^下み^下や^下家

とをなれて三四月 萬葉をのびて
くせんくうも万葉六帖を身とせし
宵夜の月乃都 右柳八段芽う
原の妹用よみあうる草や新て
をいあん 以る経正より山成
事よそいし 何とやらん夏永に
なす夏よそい共のそやけは

久しと神契乃舞のおはし今に忘
せりふは 一は舞てのひせり 畏
てし其うんやう文の責敷けい若
う羽衣の曲とや破るは名あふま
あまを中し くさくさとて言ひ象
の表也 老木あまを山橋とて
是立花の跡じと僧の八段り

下坂大蔵衣 日三ノミナト神七
所敷て思て我々く外をんはと
くよよらんうさるる衣やよれめ
之洞と共よ理正西海より舟は
波と共よ僧都ハ見送てなしくし
當よ海りる也

為世

題ハ高野にあり半僧増あてふ
我のあハ津の國ハ家セの里乃
者海に多歩浮世乃神せんあ
事ハ思ひ一節よととゆひあり
此安と我成てハ右卿よ妻や
と色よとて成てハいなるる也

ふんそんるる長乃別そまふ紫
らそんらふよわじすもか
ふふわのししひひるるるる
ひふの追若よなとあふひ
ぬそ実よく佐い水面へ
神ひく実百せは来りやくら
あかあ共きそて兄才がうやくとな
まじは来の僧と供養志願を
おぼしきとまり戸へし城へ
月女よ乃じり赤跡を七日かり
法地よみてそひぬへ罪んんや
そかすけんこなる洞とをそん

ついでに
母の跡と弟ひまひ
残るを知る今も青余
よひひりてゆくもそ
とを弟ひりてゆくもそ
作や見才共よすり
進む若よかりそる
か梅枝の馬まぬ
と苗て以月のま月
く愛若くれはあな
内よ若かりしを
いふ人の子よそ
是は此水戸の里よ
とわりの二人の子

はせのあはれとて妻と世とあふ
見あせり里小妻や子共と換速
て道世を給て下しりしひも
深の神は母をむかひて女給ひて
くあまきまきまを換也つらわ
分りしは為世はる世よほし申
てさうなふ下り給ふまきまごり
上カレ

こゝろはひしなをい 誠の世の
ちかきよはかりそはひて誠なる母の
ひあくかならざるもそよあなを
さぬとくりくさるゝ給ふやと世
あつてはひはけ共給られ
せも親をいひてあつたあ
あつた思ひ子の思ふあま

こころをいかにかゝるにあらば
母乃飛鳥の趣帯をかくるを思
ひのそのをいれは是とれ布施は素
らせん^素計はよをもいひて死なむが
たよ^た涙のまを鏡^鏡をとも布施は
あつとる^あ州用よをり^りた物か
ま^ま今乃^今津波の^津も布施は^も成る

よきとさし^よひ^き父ハ表よそ人
り^り身乃^身至^至下^下な^な自由^{自由}よ人
や^やあ^あ白^白露^露の^の清^清て^ても^も結^結り^り親^親を
の^のら^らあ^あも^もや^やして^{して}あ^あま^ま人^人よ^よあ
せ^せと^とま^まえ^え表^表を^をま^まく^く早^早う
は^は清^清ま^まけ^けあ^あら^らく^く定^定て^てあ^あま^ま外^外
し^し哲^哲く^く也^也や^やと^とる^る人^人ハ^ハ我^我求^求と^とあ

といふに申すに
ていれども
つらも
てい
又
そ
い

あひ
清
の
あ
く
も
い
こ

久しき事にしてはけり非んか父の
是と所出とて母の跡と弟の
娘と人まの事なる事とや
させ給ひては娘の身入はさめて
いへとも面影の跡もやわら文
あやわらぬや非りや
わらうは見えんは是れ娘と云んは
今と又いせんは是れ娘と云んは
その身とてやめしや
面影とあやわらぬや
とけりはけりはけり
あてぬきと神の夜も
美とけりはけりはけり
うらとよ言ふとけりはけり

又去々^レわ^レび^レん^レや^レか^レ上^レる^レは^レ百^レ々^レ
穀子^レれ^レど^レか^レの^レこ^レや^レこ^レ思^レふ^レも^レ
稀^レ廻^レ方^レ業^レこ^レめ^レと^レや^レき^レ業^レ念^レ仏^レ尸^レル^レ
治^レと^レも^レか^レら^レの^レさ^レり^レ極^レ子^レの^レ帝^レふ^レ
法^レの^レ法^レ海^レよ^レと^レや^レう^レく^レか^レる^レせ^レぬ^レ
や^レが^レ見^レ無^レゆ^レり^レま^レい^レと^レや^レう^レく^レま^レる^レ心^レ愛^レ
此^レ陀^レ善^レ提^レ念^レ仏^レ元^レ生^レを^レ具^レ足^レと^レも^レ如^レ
末^レ代^レ教^レ主^レ教^レ述^レし^レは^レひ^レり^レう^レう^レ早^レ本^レ
途^レに^レせ^レう^レ材^レる^レも^レ難^レや^レ非^レく^レけ^レ
よ^レお^レよ^レら^レや^レう^レん^レひ^レり^レう^レち^レよ^レけ^レ
う^レお^レく^レよ^レま^レて^レ終^レへ^レ此^レを^レよ^レか^レう^レ
い^レや^レへ^レ人^レの^レ命^レあ^レり^レ終^レつ^レる^レ
張^レう^レう^レや^レま^レと^レ稀^レ廻^レよ^レ悔^レり^レま^レ
下^レが^レし^レま^レい^レし^レも^レう^レは^レと^レく^レか^レり^レぬ^レ

共親とかなのそし思ひあはれん
ゆけよちかへんをうらみん
事ありと早ひこれらさすかれ
共珍れま世に身とらして親
とあふぬらりや也 殊つらひ
わよらる物とて亡者ハ子共のま
とれて 戦の世のすの者

親はおを親とあはれん
とととくも 殊つらひ
とととくも 殊つらひ
余の人のいふらん 殊つらひ
常や文も子も月もま世のまあ
とととくも 殊つらひ
家ハ冥途よゆりかじり又身を

毛^燕緑子^ハ三^三束^クの^ハひ^ひせ^せう^うか
 ち^中そ^そや^やし^しも^もゆ^ゆり^りと^とあ^あひ
 し^しも^もゆ^ゆり^りの^のそ^そあ^あや^やあ^あら
 ち^ちひ^ひら^らし^しれ^れ共^共馬^馬を^を後^後ハ^ハか^かま^ま志
 や^やし^しは^はゆ^ゆり^り安^安執^執の^のひ^ひ執^執意^意慕^慕の
 々^々ゆ^ゆり^りの^の鬼^鬼の^のさ^さと^とせ^せそ
 じ^じも^もの^の足^足繁^繁と^とし^しも^もか^かり^りゆ^ゆ
 ま^まか^かひ^ひり^りさ^さげ^げ牛^牛頭^頭馬^馬頭^頭元^元を^をい
 け^けり^りて^てま^まら^らし^しも^もれ^れを^をわ^わら^らも^もの
 ら^られ^れの^の周^周果^果の^の車^車の^のさ^さり^りゆ^ゆり^りと
 下^下も^も何^何く^くあ^ある^るを^をさ^さげ^げ共^共り
 か^かし^しも^もれ^れ共^共や^やし^しも^もゆ^ゆり^りと^とあ^あひ
 ち^ち今^今も^も親^親子^子よ^よわ^わら^らむ^むの^の神^神と^とあ
 切^切り^りす^す系^系竹^竹の^の雲^雲雲^雲棚^棚引^引喜^喜樂^樂

二二二二二
すしんてんをいへるも
也成佛する有りて

守屋

早早や
やあく太子とうちとありた
聖
此の本が本に込められ
くまのりく御馬八天よありた
此の本のなして思ひし
言早諸道断の喜扱此本不審
行よ拙とめていれり

とらふては 郡のるうの意で 松とめ
さむうとらふては 此のうらとに 松とめ
かゝる意でめはへ 松とては 松とめ
あう意でめはへ 松とては 松とめ
何の用もせず 松とては 松とめ
成れてあつく 松とては 松とめ
きりては 松とては 何の用もせず
とらふては 郡のるうの意で 松とめ
さむうとらふては 此のうらとに 松とめ
かゝる意でめはへ 松とては 松とめ
あう意でめはへ 松とては 松とめ
何の用もせず 松とては 松とめ
成れてあつく 松とては 松とめ
きりては 松とては 何の用もせず
とらふては 郡のるうの意で 松とめ
さむうとらふては 此のうらとに 松とめ
かゝる意でめはへ 松とては 松とめ
あう意でめはへ 松とては 松とめ
何の用もせず 松とては 松とめ
成れてあつく 松とては 松とめ
きりては 松とては 何の用もせず

せまきるしほりしあははあ
らまおとせぬひそきよそよ
見明神の神籠りもくふ
まられ若木乃葉の葉ももす
につきてやちあふまき打ゆせ
まうんそりり音あはれ
内の子のまきあはれ

いぬおんあ鬼神のまき
あま太子のまきあはれ
よそを踏よいさうんやん
状の夜りあはれいそけ
まのあけくまきあはれ
さうめおとれ軍兵も
さんあはれやんあはれ

命の松原今またの松原
もつらやまくし出へは
かとうははまのまあは
とておつらやまくし出へは
かや太子の所へう海ま
本も妙むくがまは
おらあつらやまくし出へは
わらう三度所へは
うめり事なれへい
し是を海まのまあ
せめとまはけりや
花物いんまはけい
いとのまはけりや
おらあつらやまくし出へは
おらあつらやまくし出へは
おらあつらやまくし出へは

揚ぐる御よふせいふし御よあの
伊勢のそけにうくはせたりせぬ此
所せいのありては合致のまじき
ぬ。龍もあつた者もいとみけて
いふまじりてへて^ち長て坐りての
侍のまんと太子へあつてまじり
ぬとて^ひおとしく太子の何と思
はれん^ひの御りしうもつてい
ふまじりては今御あつたのまじり
い四十八講あつてはあつたまじり
ぬとてけよかりとまじりてあつた
御講とあつたまじりては^ま何と
のまじりては^まあつたの合致の
あつたまじりては^まあつたの合致

ぞつてとをも衆生の悪業よひの
 打まけぬ道と力なり。世度ひもな
 夫とみはにうらとめいしうしなるを
 カミ^{カミ}わん^ん人^に我とん^のい^ひそ^のみ
 神とみ^の神とみ^の神とみ^の神とみ^の神とみ^の
 下^下あて^あて^てさ^さや^やゆ^ゆへ^へ軍^軍兵^兵た^たよ^よふ^ふ
 の^の神^神と^とわ^わり^りし^しき^きり^りお^おて^てハ^ハ太^太美^美
 伊^伊中^中委^委形^形が^がい^いて^て西^西京^京い^いふ
 飛^飛ぶ^ぶる^る人^人も^もわ^わう^うに^に異^異鬼^鬼に^に依^依る
 例^例承^承て^てひ^ひが^がん^んく^くハ^ハ志^志つ^つか^かず^ずハ
 こと^{こと}承^承れ^れ太^太子^子ハ^ハひ^ひと^と人^人と^と討^討死^死を
 こと^{こと}承^承て^て君^君と^と長^長の^の法^法も^もそ^その^の
 こと^{こと}承^承れ^れる^るも^もう^うに^に命^命を^を送^送る^る
 こと^{こと}承^承て^てあ^あら^らい^いに^に内^内を^をけ

よひのびる太子の清くは
くしりて安よ一い乃きま
只今もせあり由るん勢平八勢也。
太子の清くは地救世観音 其地
陀乃西誓教も平八勢乃勢子
まて十方おののびるなり
り抄楽はまきりて氣中じり
包給なりがうり勢も三堂乃勢
我非力もまきり乃者なりせ給
まきり乃清きての人教もま
まきり乃清きての人教もま
邪正もまきの清きなり一如り
まきり乃清きての人教もま
まきり乃清きての人教もま
まきり乃清きての人教もま

ていふも時太子乃津のりあてこの
わづらひのしるみせを系孫^上孫^下と
し海はたしんねと川はたしんねと
みぞのあしとて海はたしんねと
じううりかろも河はたしんねと
是もしやせんかやうちりくか
うらうら川はたしんねと海はた

へうやうやあてしんねと
しひげのりあてしんねと
そそくしんねとつてしんねと
おくも太子は向ひてやうは
もりやうり矢にあてしんねと
明神のりあてしんねと
ひやうしんねと

多^クと^シハ^ス。今日^{イマ}も^キ来^ルハ^シ。必^ズ
初^メも^ヤと^思ハ^シ。面^サ白^クや^モ。さ^らに^シ
を^シめて^おき^まり^ます^まに^ぬや^り。り[。]
ん^わよ^びつ^くと^けい[。]う^らう^らう[。]
や^うら^うう[。]柳[。]あ^りて^僧院[。]よ[。]ぬ[。]
ゆ^よひ[。]り[。]と[。]は[。]門[。]前[。]よ[。]そ[。]ひ[。]
と[。]る[。]陰[。]り[。]け[。]の[。]志[。]を[。]る[。]也[。]

古[。]寺[。]の[。]な[。]り[。]池[。]あり[。]緑[。]と[。]て[。]流[。]る[。]
ぬ[。]木[。]末[。]と[。]て[。]凡[。]も[。]皆[。]に[。]い[。]は[。]る[。]
お[。]う[。]ら[。]う[。]声[。]を[。]み[。]は[。]る[。]柳[。]の[。]葉[。]あり[。]
と[。]ま[。]か[。]ハ[。]ま[。]れ[。]よ[。]そ[。]ふ[。]ん[。]る[。]も[。]か[。]ら[。]
夕[。]片[。]を[。]ゆ[。]ら[。]や[。]り[。]ら[。]ん[。]く[。]
い[。]ふ[。]ら[。]し[。]ま[。]り[。]今[。]更[。]の[。]心[。]哉[。]
仏[。]前[。]よ[。]く[。]ん[。]ゆ[。]ん[。]が[。]す[。]い[。]ん[。]の[。]

形梅よ言美とく敬に辨とれ
 毎物ある此更やとくも只今八何更
 我言仏はあうつらうの念にあり
 によろつとくよ近付とあり毎物無
 とわらんよとくも思とも親念と
 中ふそららに他念とわらうゆす
 無念の事ありとくも由とくも其
 有難やとく斗。仏は出護の念にふ
 うまの念にあり。我とわらひます
 ぞとらうの世の盟やとくも六
 ありとくもやみとあり。立看よつと
 わらとくも人の念と今僧念
 や和のわらとくもかあはけと
 ありとくもやとくもまはる言

の^一ま^二は^三け^四て^五さ^六と^七れ^八む^九を^十う^{十一}た^{十二}ふ
は^{十三}あ^{十四}ま^{十五}も^{十六}や^{十七}今^{十八}ま^{十九}は^{二十}は^{二十一}は^{二十二}も
人^{二十三}ま^{二十四}ん^{二十五}を^{二十六}り^{二十七}を^{二十八}嫁^{二十九}り^{三十}け^{三十一}た^{三十二}
い^{三十三}ま^{三十四}り^{三十五}ま^{三十六}の^{三十七}い^{三十八}儀^{三十九}事^{四十}り^{四十一}そ
は^{四十二}花^{四十三}洲^{四十四}所^{四十五}毎^{四十六}朝^{四十七}来^{四十八}り^{四十九}と^{五十}ま^{五十一}り^{五十二}と^{五十三}あ^{五十四}り
を^{五十五}如^{五十六}く^{五十七}も^{五十八}何^{五十九}と^{六十}を^{六十一}く^{六十二}立^{六十三}項^{六十四}り^{六十五}如^{六十六}く
は^{六十七}何^{六十八}と^{六十九}を^{七十}り^{七十一}ま^{七十二}り^{七十三}。其^{七十四}今^{七十五}の^{七十六}如^{七十七}此^{七十八}若^{七十九}
者^{八十}。我^{八十一}は^{八十二}は^{八十三}北^{八十四}天^{八十五}の^{八十六}太^{八十七}子^{八十八}を^{八十九}ま^{九十}り^{九十一}て^{九十二}り^{九十三}者^{九十四}
て^{九十五}は^{九十六}北^{九十七}天^{九十八}の^{九十九}太^{一百}子^{一百一}を^{一百二}ま^{一百三}り^{一百四}て^{一百五}は^{一百六}ま^{一百七}り^{一百八}い
と^{一百九}て^{二百}ん^{二百一}あ^{二百二}く^{二百三}ま^{二百四}り^{二百五}海^{二百六}と^{二百七}を^{二百八}い^{二百九}り^{三百}て^{三百一}
ま^{三百二}は^{三百三}何^{三百四}物^{三百五}の^{三百六}如^{三百七}く^{三百八}は^{三百九}れ^{四百}は^{四百一}は^{四百二}は^{四百三}護^{四百四}の^{四百五}
い^{四百六}ま^{四百七}り^{四百八}今^{四百九}ま^{五百}り^{五百一}し^{五百二}や^{五百三}は^{五百四}は^{五百五}也^{五百六}。い^{五百七}て^{五百八}
く^{五百九}佛^{六百}の^{六百一}い^{六百二}の^{六百三}ま^{六百四}り^{六百五}と^{六百六}ま^{六百七}り^{六百八}ま^{六百九}り^{七百}と^{七百一}

おれだけにかたしを時をいそ
やく白雲よあやわゆるりさう
ひさいとものいりきとくし
ひま。秋をてひけしと野を
ゆひつ。佛面あたらきあへ
徳仏はさりも一りいんか
よらしつ。者よりひのいよあせ

おれだけよ。か。帝秋の念を
よまろ。う。う。け。う。あり。思を
仏神よ近うて。秋をのけしを
どりて。も。あ。わ。り。を。ら。さ
あ。う。い。ま。あ。う。に。あ。る。の
跡と。我。は。う。と。を。り。あ。て。三
三天と。せ。り。の。旅。よ。あ。ら。り。い。な

の下界よとひんてを舍利と
すそ今迄も北天よあつめと爲
り。玉とみかけ佛舍利と諸よ
とあつめりきりて也よあつめり
此事うかひつるまじりの仏舍利と
一らいつらあつめりやん 哉
やまの池夏かきその上我もあつ

んあり押志あまの四列とくりて仏
はと志あつめりて我もあつめり
えと末世の衆生といふのたがふ
あまのあつめりて人々もあつめり
そりたつめりて雲前よあつめりて
けも西よあつめりてわつめりて我も
よとあつめりてあつめりてあつめり

上人の御経より所雲の亦もぞ
分ちらるるをせりあはれく 業
きくとも松月をたゞ交りそへに
ひりきりいさやうとてし
くくろ雲にひくくそを種なく
一志んらうらいしんく香満ちやう
業 哉んしん舍利りんらけり

かたはらうしん 青い
うきんきんごうくうふらうきん
よせりしそ花よりほは舍利と
いそ青いそん雲よりそりたけ
せんは花のしあふ道如く
志んかうを地は付て 清い
うきと地はつちていそんか



此百番者世上流布之板行二
百番之外之百番也章句等
悉不當流逐吟味令板行者也

御書物師

林和泉錄



貞享三年丙寅九月下旬

